SCJ 48

ネパールの子どもたち

ガザのこと、イラク難民のこと

ステッドラー日本の竹内氏

おかえりなさい、定松さん



Cover Story
[表紙]



世界で最も高い山々が連なるネパール。首都カトマンズから約400km南東にある事業地へ向かう小型飛行機から、青の美しさに魅かれて撮影しました。山を越えればチベット高原、反対側にはインドの平原が広がっています。

岡田 茜（SCJスタッフ）

About Booklet
この冊子について

皆さまのご支援が子どもたちのためにどのように活かされ、何をもたらしたかをお伝えしたい。そして、子どもたちだけでなく、スタッフやSCJに関わるすべての人々のことを皆さまの近くに感じて欲しい——。この冊子は、私たちのそんな願いを形にしたものです。

SCJ 48

Contents

4 [World's Children] 世界の子どもたち
ネパールの子どもたちから学んだこと

6 [SCJ Report] 活動報告
ガザ、緊急支援
ヨルダンにおけるイラク難民教育支援

10 [Toy Box] ネパールのおもちゃ箱

11 [Stakeholder Interview] 特別インタビュー
ステッドラー日本株式会社
代表取締役副社長 竹内成治氏 インタビュー

12 [Staff Episode] SCJの一員として
SCJ事務局次長 定松栄一

14 [Topics] [Information] [Voice]

15 [World's Picture] どうしても載せたかった写真

発　行：社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
〒101-0047 東京都千代田区内神田2-8-4 山田ビル4F
Phone 03-6859-0070（代表）

印刷協力：株式会社コア（この冊子は、株式会社コアのご協力により印刷・製作しています）

[スタッフ]
デザイン・編集：株式会社ピーアールハウス

世界の子どもたち

World's Children

Federal Democratic Republic of Nepal

ネパールの子どもたちから学んだこと

SCJの事業地、ネパール東部のマホタリ郡ダムラ村のチャイルド・センターを訪問しました。そこで出会ったのは、身近にある問題を自ら考え、行動に移す子どもたち。子どもの持つ力を再確認しました。

岡田 茜（SCJスタッフ）



子どもたちからもらったマリーゴールドの首飾り。ネパールの人は、細やかな気配りで私たちをもてなしてくれる

目的地、ダムラ村を訪問

1月下旬、ネパールのダムラ村にあるチャイルド・センターを、子どもグループの実態調査（※）のために訪れました。

ダムラ村の人口は約1万人。そのうち読み書きができる人は、村全体の4分の1にも満たないのが現状です。

学校に通うことができている子どもは約半数で、女子の就学率は男子よりもずっと低いこと、親が子どもを出稼ぎに出していること、カーストなどの差別があることなど、子どもを取り巻く問題が山積みです。



ネパール東部の村の典型的な風景。1月下旬のマホタリ郡は汗ばむ陽気

子どもたちが語った願い

迎えてくれたのは、12歳から14歳くらいの学校に通う子どもたち。その子どもたちに話を聞いてみると、最近熱心に取り組んでいることを教えてくれました。

センターの子どもたちは、地元のNGOスタッフとともに、学校へ通えない子どもの親を訪ねたり、路上劇を演じたりして、教育の必要性を村全体に訴えています。

「同じ村に住む学校に通えない子どもたちが学校で学べるようにしたい」と、子どもたちは強い願いを持っているのです。



小荒井SCJスタッフの質問に耳を傾ける子どもたち



調査の途中で入った食堂。「おかあさんが病気だから」と、12歳くらいの少女が作ってくれた、おいしいご飯

学校に通えない女の子

ダムラ村で特に問題なのは、中学生ぐらいの年齢に達した女子が、家事や親の都合で学校に来ることができないこと。かろうじて出席した場合も、授業の遅れなどの理由から、6、7歳くらいの子どもたちに交じって勉強することに当然とまどいもあります。

そこでセンターの子どもたちは自分たちにできることを話し合い、学校が終わった後に、センターで識字教室を開いて、15人の女子に簡単な読み書きを教えています。

子どもが大人を変える

子どもたちの活動は、周りの大人たちの意識も変え始めています。以前は、子どもが学校に通わなくても誰も気にかけることはありませんでした。しかし今は、そういった問題について議論するようになりました。

息子をインドのホテルに出稼ぎに出していたある父親は、村人たちの働きかけで息子を家に連れ戻し、学校に通わせることにしたそうです。

子どもたちの純粋な活動が大人たちの意識を変える。そんなすごいことがネパールでは普通に起きていました。



地元のジャーナリストが子どもたちと一緒に作るニュースレター。隔月で500部、学校を中心に配布する。夢やジョークから、女子の早婚の問題など子どもたちが抱える問題を絵などで伝えている



調査員の1人、「ラオスのこども」の森透さんは、子どもたちとの出会いのお礼に日本の紙芝居を披露。集まってきた子どもたちから笑顔がこぼれた



子どもたちのために地元で活動する「アスマン ネパール」のスタッフ。教師の体罰のこと、最下位カーストの差別のこと、子どもの保護などに取り組む。女性も積極的でたのもしい

※この記事は、SCJもメンバーの「JNNE 教育協力NGOネットワーク」の現地調査に同行した際のお話です。SCJからは小荒井理恵スタッフが調査員を務めました。記事掲載を快諾してくださった調査員の森透さん（ラオスのこども）、田中幸子さん（ERIC 国際理解教育センター）に心から感謝します。

SCJ Report

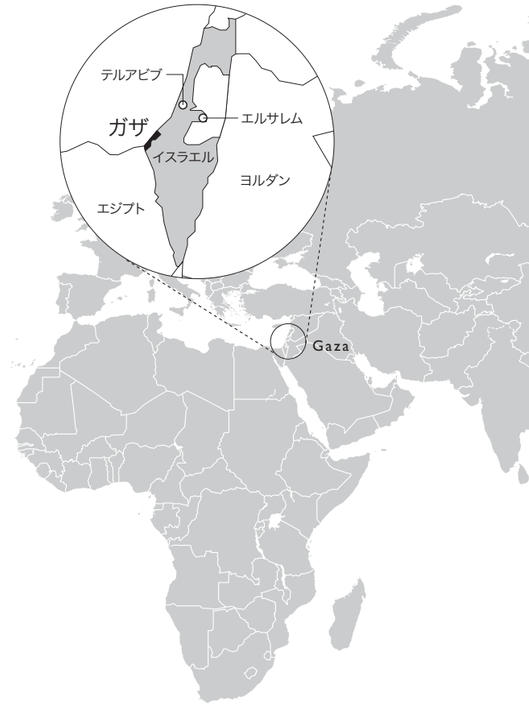
活動報告

ガザ

停戦後の今こそ、支援が求められています

ガザ、緊急支援

昨年12月末から約3週間にわたる紛争で、ガザ地区は甚大な被害を受けました。SCでは、8万人の子どもと家族に支援を行っていますが、現在も電気、水道が途絶えがちな状況です。あらゆる必需品が不足し、医療もままならない状況下で、多くの人々が支援を必要としています。





母親のサアダと娘のヘジャール
©Save the Children / Jon Bugge

ガザでの紛争は多くの子どもを巻き込み甚大な爪跡を残した

今年1月11日、紛争の真っ只中のパレスチナ自治区ガザで、ひとりの赤ちゃんがこの世に生を受けました。名前はヘジャール、アラビア語で「避難」の名前を持つ女の子です。母親のサアダは、避難所生活を送る中でヘジャールを出産しました。ヘジャールは病院で生まれましたが、当時、病院のベッドは紛争で負傷した人々で溢れており、サアダは出産後、わずか数時間で避難所へ戻らなければなりませんでした。

「1500人もの人々が一つの避難所に身を寄せていて、毛布も足りません。SCの支援物資を支給してもらうまでは、ヘジャールに夫のコートをかけて寒さをしのいでいました。病院側が忙しかったこともあり、まだ出生証明書ももらっていません」（サアダ）

サアダと夫のハテムは願います。

「私たちが経験していることを将来彼女が経験せずにすむこと。望みはそれだけです」

温かいご支援、ありがとうございます。

日本では、個人寄付と助成金を合わせ、約1,400万円が集まりました。皆さまを含め、世界中からの支援で、8万人に対して、以下のことを実施できました。※

※数字は2009年3月10日時点のものです。

■セーブ・ザ・チルドレン支援実績

配布物資の実績

◉乳幼児のための物資
- 8,570のおむつ
- 100の乳幼児キット（毛布、ボディスーツ、毛製の帽子など）
- 1,055の乳幼児衛生キット（皮疹用クリーム、低刺激性石ケンなど）
- 496の移動式ベビーベッド

◉生活必需品
- 2,198の衛生管理キット（石ケン、タオル、ボトル飲料水、生理用品など）
- 931の防寒用ビニールシート・マットレス
- 150のトイレットペーパー
- 460の衣服（制服や靴を含む）

◉食糧、飲料水
- 3,373の食糧セット（砂糖、米、食用油、豆など）
- 1,200のボトル飲料水

◉医薬品、医療品（ガザ地区の複数の病院へ）
- 850のベッドシーツ
- 300の手術着
- 50の看護婦用作業着
- 760のタオル
- 720の手術用スモック

医療支援

避難所における診療所の設置と健康診断の実施
妊産婦の検診の実施

子どものための心のケア

240の玩具キット（おもちゃや文具）の配布
23の「安全な遊び場」の設置
130のレクリエーション・キットを13の幼稚園へ配布
「安全な遊び場」において60のレクリエーション・イベントを実施



支援物資を配布している様子　©Save the Children / Eman Mohammed



遊具に笑顔を見せる子ども
©Save the Children / Osama Damo



遊びを通じた心理社会的ケア
©Save the Children / Jon Bugge

■今後の活動

緊急支援物資の配布や医療支援を継続する一方、子どもの保護や心のケアの支援をさらに拡大していきます。

● 幼稚園への玩具や学用品の提供　● 幼稚園の運営サポート　● 教員研修　● 子どもや親を対象とした心理社会的ケア　など

～ 今後も更なるご支援のほど、よろしくお願いいたします。～

SCJ Report

活動報告

ヨルダン



イラク難民の子どもたちに教育を

ヨルダンにおけるイラク難民教育支援

イラク国内の混乱の中、200万人ものイラクの人々は、母国を離れ、ヨルダン、シリア、レバノンなど近隣諸国に避難し、難民生活を送っています。SCJではイラク難民の子どもたちが避難先の教育施設で、学校へ通えなくても勉強を続けるための支援を行っています。



駐在スタッフ
高松郷子
Kuniko Takamatsu


ヨルダンの貧困地域

どんな困難なときでも子どもたちには学ぶ機会を与えたい

2003年3月のイラク戦争開始から6年、数十万人もの人々がヨルダンで生活しており、その半数以上が18歳未満の子どもと推測されています。イラク難民の流入により、水道・電気などのインフラや病院・学校などの公共サービス、治安維持にかかる負担が増加し、ヨルダンの財政負担は窮迫しています。ヨルダン政府は、教育と保健に重点をおき、財政・技術面でのサポートを国際社会に呼びかけると同時に、2007年8月、居住権の有無に関係なく、イラク人の子どもをヨルダンの公立学校に受け入れることを決定しました。しかし、ヨルダンではもともと就学前の幼児を受け入れるシステムが整っておらず、多くの子どもたちは教育機会を得られない状態にあります。

このような状況を考慮し、SCJでは、同年11月から「Rewrite the Future」(※)の一環として、イラク難民の3~6歳の子ども6500人を対象にヨルダンで早期幼児教育の支援活動をスタートしました。これは主にジャパン・プラットフォームの助成を受けて展開している活動で、これまでに、早期幼児教育の指導者育成、教育施設の修復、教材の配布などを行ってきました。

最初はヨルダンの幼稚園の安全性や教育の質に不安を抱えていた親も、ワークショップに参加し、実際に幼稚園を見て、通うことにしたというエピソードもあります。6歳のアフメッドくんは、「毎日とても楽しいし、先生も大好き。いつか僕がイラクに帰った時にイラクの子どもたちに勉強を教えることができたらいいな」と笑顔を見せます。


イラク人ボランティアから真剣に入学説明を聞く母親

さまざまな支援プログラムに加え、国籍を超えて協力し合う子どもの親たち

そのほかにも、避難生活で物質的・精神的に厳しい環境にあるイラク人園児の親を対象に、子どもへのストレスの影響やストレス軽減方法、家族の絆を作り出すためのゲームや話し合いの仕方などをレクチャーする研修も開催しています。参加者の顔ぶれは、イラク人、パレスチナ人、ヨルダン人など多岐にわたっていますが、不安定な中東情勢の中でも、子どもたちを囲み、親たちは国籍を超えて協力し合います。今年2月からは、新たな支援活動のひとつとして、親による絵本作りのワークショップを開始しました。



子どもと手遊びをする高松スタッフ


アラビア語の教材




花・木を植えたり、布に絵を描くなどのワークショップの様子

ヨルダンに避難し、長い間働くこともできない状況下で、親たちも大きなストレスを抱えています。そのような厳しい状態の中でも、親たちは子どもに少しでも質の良い教育を受けさせたいという思いを強く持っています。

日本からの支援でそんな思いに少しでも応えたい。それが、私たちの心からの願いです。


土漠につくられた遊び場にて

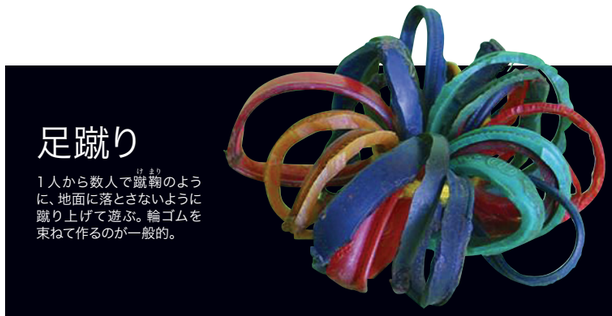
※「Rewrite the Future〜いっしょに描こう！子どもの未来〜」は、紛争地の子どもたちへ教育支援を行う、SCのグローバルキャンペーン。

Toy Box

ネパールのおもちゃ箱



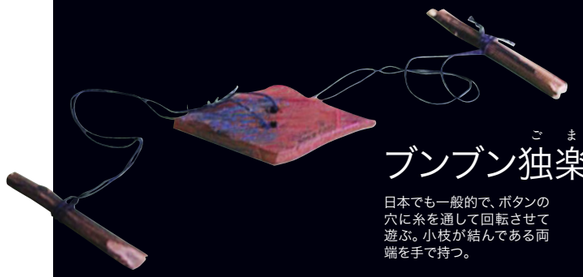
遊ぶことは学ぶこと。
遊びは子どもたちの笑顔を生み、協調性や創造性を豊かにします。
世界中の遊びや玩具を通して、子どもたちの世界を覗いてみましょう。



足蹴り

1人から数人で蹴鞠（けまり）のように、地面に落とさないように蹴り上げて遊ぶ。輪ゴムを束ねて作るのが一般的。





ブンブン独楽（ごま）

日本でも一般的で、ボタンの穴に糸を通して回転させて遊ぶ。小枝が結んである両端を手で持つ。



石蹴り

壊れた陶器を削って作ったもの。地面に的を描き、そこをめがけて蹴り入れる遊び。

人形

主に鑑賞用。面をかぶっているもの、さまざまな色の種類がある。



独楽（こま）

大きさは約4cm。日本と同様に、上をつまんで回転させる。誰の独楽が一番長く回っているかを競う。

思わず童心に返る ネパールの指遊び

ネパールの子どもは主に、「足蹴り」という輪ゴムを束ねたものを蹴り上げる遊びをします。そのほかに凧揚げや風車など、さまざまな遊び道具があります。もちろん道具を使わない遊びもたくさん。

例えば、2人1組でできる指遊び。どちらかがオニになり、相手が人差し指を上に向けて「魚（マチャ）、魚」といいます。オニはその人差し指をつかまえます。相手はつかまれそうになったら人差し指をひっこめて、親指を立てます。親指は蛙（ブヒャーグト）役。魚を捕まえればオニの勝ち、相手が蛙をつかませることができれば相手が勝ち。童心に返って、子どもと遊んでみてはいかがでしょうか。

協力：日本玩具博物館

Stakeholder Interview

特別インタビュー 1



支援を通じて満足感を得ることが自己実現にもつながる

自分の過去の体験や支援活動に取り組む身近な友人たちを見ていて、最近実感しているのは、「社会貢献」は肩肘を張って行うものではなく、自分ができることを地道に進めていくのが大切だということ、人のための活動ではなく自分の喜びになるということです。そして、それが自己実現にもつながっていくのではないでしょうか。

仕事で世界各地を旅して、路上で生活する子どもたちも多く目にしてきました。でも、どんな貧しい環境の子どもたちも瞳はきらきらと輝いている。そんな子どもたちの希望に満ちた瞳が活動のモチベーションにもなりますし、私たち自身も楽しみながら、彼らに夢を与える活動を継続的に行っていきたい——。そんな風に考えています。

子どもたちの笑顔を描く「ポストカードコンテスト」を世界的なイベントに

ステッドラー社では、世界の子どもたちの未来を考える日として、5月6日を「ワールド・キッズ・カラーリング・デー」と定めました。その活動の一環として、ステッドラー日本ではSCJとともに、ポストカードコンテスト「エガオをエガコウ。」を開催します。これは、地球の未来を担う子どもたちの笑顔を自由に描いてもらおうというイベントで、年齢問わず、どなたでもご応募いただけます。どんな作品に出会えるか、今からわくわくしています。今年が初めての開催となりますが、今後は世界24ヶ国に会社を持つグローバル企業として、そして文具という子どもの教育に関わるメーカーとして、世界的なイベントに発展させていきたいですね。

ステッドラー日本株式会社

代表取締役副社長 **竹内成治**氏 Masaharu Takeuchi

できることを地道に無理なく継続することが大切

ドイツに本社のある老舗文具メーカー、ステッドラーは、社会貢献活動に積極的でSCとグローバルパートナーシップを結んでいます。今回は日本支社の代表取締役副社長を務める竹内さんに支援活動に対する考え方、企業としてのCSR活動について伺いました。



【キャンペーン対象商品例】



ノリスクラブ トリプラスクレヨン
10色セット
¥1,575（本体価格 ¥1,500）



ステッドラー エルゴソフト アクェレル 水彩色鉛筆
12色セット
¥2,121（本体価格 ¥2,020）



ノリスクラブ トリプラス色鉛筆
12色セット
¥882（本体価格 ¥840）

対象商品を購入すると、収益の一部がセーブ・ザ・チルドレンへ寄付されます。対象商品やキャンペーン内容など、詳しくはHPまで。

【お問い合わせ】
03-5835-2815
http://www.staedtler.co.jp/

【ポストカードコンテストの詳細】
http://www.staedtler.co.jp/2009wkcd/contest/



セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン
事務局次長

定松栄一
Eiichi Sadamatsu

生まれた国が違うだけ それだけで、人生の選択肢が 異なることに衝撃を受けた

SCJでネパール支援に携わり6年。トータルで11年におよぶネパール滞在から帰国した定松スタッフが、これまでのNGO活動に携わるようになったきっかけと今後の抱負、自身の目に映ったネパールについて語ります。

子どもが学校に通い「学ぶ」ことで、大人にも劇的な変化が訪れた

86年に日本赤十字社の駐在員としてエチオピアに滞在したことが、私の最大の転機でした。同じ時代に生まれながら、国が違うだけで人生の選択肢が大きく異なることを目の当たりにし、衝撃を受けたのです。当時、アフリカは飢餓状態。このような状況下で生きる子どもたちの思いを想像することもできず、それでもどうにかこの現状を変えたいと思ったとき、支援活動という仕事がより現実的に迫ってきました。

活動の中でうれしいのは、「ありがとう」の言葉や純粋な笑顔。また、驚かされるのは子どもが変わることで周囲の大人たちも変わるということ。ネパールの貧しい集落では、大人も子ども汚れた身なりをしていました。学校に通うようになり、衛生管理を学んだ子どもたちは、親の不衛生さが気になって仕方がない。子どもたちに指摘されることで、大人たちにも劇的な変化が見られたのです。教育や子どもたちの持つ力の大きさを実感した出来事でした。

まだ日本の速いペースに戸惑うことも多い毎日ですが、今後、事務局次長として力を入れていきたいのは、若者に充実感を持って活動してもらえる環境を整えること。積極的に新しいことに挑戦できる機会を作りたいと思っています。例えば、海外の現場に行くと日本国内とは異なる文化やメンタリティの違う上司、同僚と仕事を進めていくことに戸惑うことも少なくありません。けれど、そういった経験を通じて知らなかった自分に出会うことができるのです。常に「新しい自分」を発見して欲しいですね。



幼稚園を視察した様子

就学率や教育の質を改善し「学校へ通ってよかった」そう思える環境づくりを

ネパールという国を一言で表現するなら「多様性の国」。日本のおよそ40％の面積の中に、海抜500m以下のところもあれば、世界の最高峰エベレストの頂上まで、実に8000m以上もの標高差があります。谷を一つ越えれば、生活パターンも違い、大雑把に数えても50種類以上の言語が存在します。

就学率も場所によって大きな差があります。国全体で見れば、小学校の就学率は8割を超えますが、農村部では片道2時間かけて学校に通わなければならない子どもも少なくありません。貧しい家庭では親は子どもを学校に通わせることよりも家の手伝いをさせることを重要視する傾向があり、女子はいずれ結婚してしまうので教育を続けさせても意味がないといった考え方も根強く残っています。

「教育の質」も決して高くなく、就学率の増加に、学校の受け入れ体制がついていかず、1クラス100人以上の生徒が詰め込まれることも。遅刻や早退を繰り返す教師も存在し、こういった状況を改善していくこと、子どもたち本人や親が「やはり学校に通って良かった」と思ってもらえる環境を整えていくことが今後の私たちの課題です。

自主性に富んだ子どもたちの団結力で大人も協力的に

ネパールの子どもたちは、おそらく日本人が想像する以上に、自分たちの意見をはっきり主張します。私たちが支援活動を行っているとき、ある小学校の屋根が嵐で飛んでしまったことがありました。このままでは授業ができないと、校長が生徒の親たちに修理を手伝って欲しいと呼びかけたものの、農作業が忙しい時期だったこともあり、誰ひとり協力してくれなかったのだそうです。そのことを耳にした子どもたちは、「それなら僕たちがデモをする」と40人ほどで畑に行き、「鍬を取るのをやめて、学校の屋根を修理しよう」と訴えました。すると校長が説得しても動かなかった親たちも、「子どもたちがそう言うなら」と、すぐに学校に出向き、約3時間で修理が完了したそうです。「子どもたちには大人にはない力がある」という校長の言葉とともに、とても印象に残っているエピソードです。ネパールは確実に前進していると思います。

学校で勉強する子どもたち



Information

ブルガリ、創立125周年記念 ペンダントの収益の一部を寄付

ブルガリ ジャパン株式会社様が、先に販売されたリングに続き、3月20日よりシルバー製のペンダントを日本先行販売、その収益の一部をSCの「Rewrite the Future」へご寄付くださいます。

（お問い合わせ：ブルガリ カスタマーインフォメーション 03-6362-0100　http://www.bulgari.com）

SCの子育ての本、間もなく出版

セーブ・ザ・チルドレンは子育ての本「ポジティブ・ディシプリンのすすめ」を発売します。子どもの発達に関する知識や子どもの人権の視点、そして効果的な子育てに関する研究結果の詰まった1冊です。本書は「子育ての目標を考える」ことからスタート。子どもの「やってみたい」「大きくなりたい」気持ちを見守りながら、日々の子育てで起こる小さな問題を解決します。著者が世界に提唱する子どもを否定しない前向きな子育てについて一緒に考えてみませんか？

（お問い合わせ：明石書店 03-5818-1171）

Voice 読者の声

「前回のニュースレターにあったバーミヤンの子どもたちの絵を見て、彼らが経験したことの重さを感じると同時に、ふつうの“子ども”なんだと感じました。遠い世界のことではなく、彼らも私と同じ今を生きていて、私と同じ明日があるということを心にとめていたいです」

大学生、22歳

Topics／最近のできごと

～お伝えしたいことが、まだまだあります～

上野製薬　創業90周年記念 SCチャリティコンサート

1月13日、サポート企業の上野製薬株式会社様が、東京オペラシティにてベルリン・フィル八重奏団のコンサートに協賛され、チケット売上の一部とあわせ、セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンへ多額のご寄付をくださいました。



上野ご一家と駐日オーストリア大使（右から3人目）

今福ゆり子スタッフ、SCの緊急支援トレーニングに参加

1月中旬にSC世界連盟は、実際の緊急支援で効果的な活動を行うことができる人材の育成を目的に、自然災害が起きたことを想定した緊急支援のトレーニング（ERPトレーニング）をインドで開催しました。さまざまな国から異なるスキルや経歴を持ってやって来たスタッフと1つのチームを組むことは難しくもありましたが、被災者へ支援を届けるため、その困難を克服してチームが一丸となることの大切さを学ぶことができました。



仲間とともに。写真中央が今福スタッフ

イケアの家具でオフィスを一新

昨年末、サポート企業であるイケア・ジャパン株式会社様から家具のご寄付をいただきました。カラフルなデザインで、チャイルドフレンドリーなオフィスになりました。



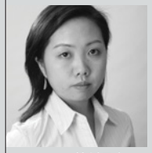
受付



大会議室

鈴村彩乃スタッフ、定松スタッフから引き継ぎ ネパール事務所に赴任

「長年の紛争が終結しようやく平和が訪れたネパールですが、紛争の影響を受けた子どもたちへのケア、そして根強く残る民族やカーストによる対立・差別の問題など、これからの国の再建に向け課題は山積みです。『新ネパール』の未来を担う子どもたちが安心して育つことができる環境作りをお手伝いできればと思っています」



鈴村スタッフ

World's Picture

どうしても載せたかった写真

スリランカの子どもたち





いつでも明るく元気いっぱいの子どもたち

※ジャパン・プラットフォームは、自然災害や紛争など世界中の人道支援に対して助成を行う援助組織です。

この2枚の写真に写っているのは東部の内戦が終息し、遠く離れた避難キャンプから自分たちの村に帰ってきたばかりのスリランカの子どもたちです。

写真上は、内戦で学校が壊されてしまったために、青空教室に参加している子どもたち。赤いポロシャツの女性はセーブ・ザ・チルドレンの職員で、子どもたちからお姉さんのように慕われています。この日も彼女が到着すると、あっという間に子どもたちが集まってきて、勉強のことや魚釣りのことなどを思い思いに話していました。スリランカの子どもたちに“人見知り”という言葉は存在しないようです。

写真下はジャパン・プラットフォーム（※）の助成で作られた幼稚園児用のブランコで遊ぶ小学生。幼い子の遊具と分かってはいても、新しいブランコやすべり台の誘惑には勝てないようで、小さな子どもたちがいなくなる夕方になると小学生が集まってきます。遊具が小さいため、時々ブランコを壊してしまうこともありますが、そんな時はすぐに大人たちが修理してくれます。

スリランカの人たちはみんな日本が大好きで、日本のことをもっと知りたいと願っています。SCJの活動がきっかけとなり、2つの国の間でひとつでも多くの交流が始まれば、これほどうれしいことはありません。

山本俊輔（SCJスタッフ）

Editor's Note

編集後記

その土地の言葉を知らない国へ出かけるときは、必ず事前に暗記する言葉が2つあります。それは「こんにちは」と「ありがとう」。今回出張したネパールでは、それぞれ「ナマステ」と「ダンニャバード」と言います。それに加えて、言葉と同じくらい素晴らしいコミュニケーションツールはカメラ。今回の出張では、ポラロイドカメラを持参しました。必ず2枚撮って、1枚は地元のお世話になった人などに渡します。写真をじっと見つめた後、大切そうに手帳にしまってくれた姿が忘れられません。

岡田 茜（SCJスタッフ）



発行：社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

www.savechildren.or.jp